

入社してもう数年になる。

私は、この不動産会社で現場経験を積みながら、多くの新人研修も任されてきた。教育マニュアルは隅から隅まで頭に入っているし、これまでどんな新人でも一定のレベルに育て上げてきた自信がある。けれど今年の新人は、どうにも手強い。

「ここは、お客様をご案内するときが一番最初にお見せするスペースになるから、特にハキハキと明るい声で説明してね？」

研修用の模擬住宅のリビングで、私は笑顔を作りながら告げた。だけど、隣に立つ新入社員の新庄は、ノートも開かずペンも握らず、ただじっと私を見つめている。

「……聞いている？」

「聞いてます」

「じゃあ、さっきの説明、新庄くんならどうする？」

皮肉交じりに問いかけたのに、彼は迷いなく口を開いた。

「『こちらがリビングになります。南向きで日当たりが良く、窓を開ければ風通しも抜群ですよ』……そんな感じですよね」

息を呑んだ。完璧。言い回しも、間の取り方も。

「……ちゃんと聞いてたんだ」

「……はい」

「でも、なんでメモ取らないの？ 新人なら普通、必死に書き込むものよ」

「……書かなくても覚えられるので」

さらりと返されて、胸の奥に小さな苛立ちが灯る。まるで、あなたの言うことなんて簡単だ、と言われたようで。

「……ふうん。ずいぶん余裕ね」

「そういうわけじゃありません」

「じゃあ、どういうわけ？」

「先輩の声を聞いていけば、忘れません」

冗談でもなく、からかっている様子もない。ただ淡々と。

「じゃあ、次は水回りの説明ね」

「はい」

短い返事。けれど低めの声が妙に耳に残って、胸がざわつく。

「この辺りは女性のお客様が特に気になさるから、細かいところまで目を配るの。わかる？」

「……」

「たとえば洗面台の収納とか」

「……」

返事はしないのに、視線は私から一瞬も外さない。なんなの、こいつ。もっと愛想

よくすればいいのに。背は高いし、肩幅もある。スーツはまだ着慣れていなくて、ネクタイの結び目は少し緩んでるけど、切れ長の目が特徴的な涼しげな顔立ちだしもっと笑えばいいのに。本当に、無愛想なせいで損をしている。

「……新庄くん、愛想よくすればモテるだろうに」
思わず口にしてしまった。

「モテたいと思っけません」

「そういう問題じゃないでしょ」

「仕事に必要ないので」

また突き放すような言葉。私は苦笑いを浮かべるしかなかった。

今年の新人は、ほんと扱いにくい。

その夜は新人歓迎会だった。

居酒屋のざわめき、油と醤油の匂いが混じった空気。長いテーブルに料理とお酒がずらりと並び、笑い声が飛び交っている。けれど新庄は端の席に座ったまま表情を変えない。新人教育担当としては見過ごせなかった。

「新庄くん、飲める？ はい、ビール。今日もおつかれさま」

「……どうも」

「ほら。あっちにも行って、他の先輩にも注いでもらいなさいよ」

「……はい」

だけど差し出されたビールを一口含むだけで、会話はそこで終わってしまった。愛想がない。可愛げもない。そもそも社会人として失格すぎる。

「新庄くんって、本当に無口よね。いまどきの子って感じだわ」
私の皮肉を含んだ言葉にも彼はやはり何ひとつ反応を見せず、ただ静かにグラスを傾けているだけだった。

「あっ……ん、んん……部長……っ……！」

必死に声を押し殺しても、唇の隙間から甘い吐息がどうしても漏れてしまう。

居酒屋のトイレ。狭い個室の壁に押しつけられ、スカートを乱され、私は背後から容赦なく突き上げられていた。

すぐ外の通路では、男女の笑い声がこだまのように響いている。

部長に求められれば、私はいつだって応じてしまう。たとえこんな場所でも。

「……さつき新庄のことばつか見てたな。お前は若い男がいいのか？」
耳元に落ちる声は低く、嫉妬を含んでいて、背筋がぞくりと震える。

「ち、違いますっ、見てなんか……ないですっ」

答えた瞬間、腰をぐいと抱き寄せられ、さらに奥を抉るように突き込まれる。

「いいつ、あっ……あああっ」

羞恥と快感に震える身体。それでも声を漏らすことは許されない。

「……声出すなよ。誰かに聞かれたらどうする」

囁きながらも突き込みは止まらない。私は喉の奥で声を噛み殺し、浅い呼吸を必死に繰り返す。

「……新庄なんかに見向きするな。お前は俺だけの女なんだから」

「……はい……っ」

震える声で答えながらも、わかっている。彼には家庭がある。私は『不倫相手』